

2019年4月21日 イースター礼拝メッセージ

聖書:ヨハネの福音書20章1~18節

説教:なぜ泣いているのですか

はじめに

今日は、主が墓の穴からよみがえられたことを覚えるイースター礼拝を迎えております。かつての自分もそうだったのですが、多くの人たちは、「死んだ者がよみがえることなどありえない」と思っています。しかしパウロはコリント人への手紙第一15章13, 14節でこうに言っています。「もし死者の復活がないとしたら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。そして、キリストがよみがえらなかつたとしたら、私たちの宣教は空しく、あなたがたの信仰も空しいものとなります。」「空しい」ということばは、「ぶどう園に行ってぶどうの実を取獲しようとしたのに何もとれなくて、手ぶらで戻る。」そんな意味です。言い換えれば、主のよみがえりは、クリスチャンの信仰の核心部分だということになります。そんなに大切なことですから、イエスの弟子たちも最初からしっかりと主のよみがえりを信じていたのか、というとそうではない。まったく理解できなかつた。そんな弟子たちに、主はどのようにしてご自身のよみがえりを示してくださったのかを聖書から見てまいります。

1 ふたりの弟子

1) マリアから第一報を受ける

1節にある「週の初めの日」とは日曜日のことです。この日、マグダラのマリアはまだ暗いうちにイエスが葬られている墓に向かいます。イエスが十字架で死なれたのは、その日も含めて数えると三日前の金曜日でした。アリマタヤのヨセフがイエスのなきがらを引き取り、墓に納めたのがその日の日没直前です。ユダヤ教の律法によってその日の日没から安息日が始まります。安息日には仕事をしてはいけないと定められていたので、十分に埋葬をする時間がない。簡単な措置だけをしてとりあえず墓に納めた。その安息日は土曜日の日没に終わります。それでマリアは、残っていた埋葬の措置をするために日曜の朝に墓に急いでいたのです。ところが墓の穴をふさいでいた石が取りのけられ、墓は空っぽです。驚いたマリアは急いで弟子たちを呼びに戻りすぐに報告します。

マリアから知らせを受けて二人の弟子が確認に走ります。ひとりにはペテロ、もうひとりには「イエスが愛された弟子」と書かれていますが、これは福音書を書いたヨハネ自身であろうと言われていま

す。二人は墓の穴に入り、イエスのからだに巻き付けられていたはずの亜麻布が離ればなれになって置かれているのを見ます。8節に「そして見て、信じた」とありますが、これはマリアの言ったことは本当だったのだと納得した、それくらいの意味です。

2) 自分たちのところへ帰った

この二人の弟子は、イエスのなきがらがどこに持ち去られたのかさがすでもなく、さっさと再び自分たちのところへ帰ってしまいます。イエスの仲間だとわかれば逮捕され、ひどい目に遭う可能性があります。死んでしまった者のからだを探し回る余裕がなかつたのかもしれない。

そしてこの表現はもう一つ、ただ「家に帰りました」と事実を言っているのではなく、彼らの霊的な状態を言い表しているかのように思えます。というのは、イエスが何度も「死人の中からよみがえらなければならない」と弟子たちに語っていたのを聞いていたのです。それなのに、主のからだが消えてしまったという驚くべき現象を自分の目で見て確認しておきながら、イエスが死人の中からよみがえることなどありえない、と思い込んで再び自分たちの信仰の殻に閉じこもってしまった。聞いていたことと、目を見たことが全く結びつきません。

2 マリア

1) 墓の前で泣く

二人の弟子は帰ったあと、マリア一人が墓の前に残ります。マリアは、かつて七つの悪霊につかれて大変苦しんでいたところをイエスによって助けられ、それ以来イエスの弟子となった女性でした。自分を救ってくれたのちの恩人が十字架で殺されたことだけでも大変なショックですが、それに加えて、からだは何者かによって持ち去られてしまいました。それまで張り詰めていた心の糸がプツンと切れて、もう立ち上がる力もなくなつて墓の前で泣き崩れるのです。

2) 墓の中をのぞき込む

それでも、ほんとうにからだはなくなつたのか信じられない。なにかの間違いかもしれない。それでもう一度墓の穴をのぞき込みます。そうすると、そこに二人の御使いが座っていて、マリアにこ

う尋ねます。「女の方、なぜ泣いているのですか。」

マリアは墓の中に見知らぬ人たちが座っているのを見ても驚いた様子もありません。感情が混乱していましたから、きっと自分の頭がおかしいのだろうとぼんやりと思ったのかもしれない。とにかくマリアは答えます。「だれかが私の主を取って行きました。どこに主を置いたのか、私にはわかりません。」

このことばも象徴的です。私たちはかつて、このマリアと同じような経験をしてきたかも知れません。愛する人を病気や事故で亡くしてしまった。だれかが私の大切な人を力尽くで奪い取って行った、そんなふうにはしか見えないのです。取り戻したいと願っても「どこに愛する人が取り去られていったのか。私にはわからない。」取り戻すことが絶対にできないとわかったとき、私たちもマリアと同じように泣き崩れるしかありませんでした。

3 よみがえられた主

1) なぜ泣いているのですか

そんなマリアの背後にある一人の方が立ちます。マリアは人の気配を感じて振り返るのですが、てつきり園の管理人だろうと思ひ込みます。その見知らぬ方はマリアに尋ねます。「なぜ泣いているのですか。」日本語聖書では訳していませんが、原文では、13節と15節は同じで表現になっている。マリアは同じ質問を墓の前で二度尋ねられたことになります。「なぜ泣いているのですか。」

もしも、墓の前でだれかが泣いていたとしても、その人に向かって「なぜ泣いているのですか」とわざわざ尋ねる人はいないでしょう。尋ねなくてもだいたい理由がわかるからです。それなのに、なぜ二度もわざわざ同じ質問をするのでしょうか。イエスは神の子ですから、泣いている理由を知らないはずはない。そうしますとこうなる。あなたは墓の前で泣く必要などないのに、どうして泣いているのですか。そんな意味で尋ねています。

2) マリアの名を呼ぶ

泣く必要がない、その理由はすぐに明らかになります。16節。「イエスは彼女に言われた。『マリア。』彼女は振り向いて、ヘブル語で『ラボニ』、すなわち『先生』とイエスに言った。」

これも不思議なことに、マリアはそばに立っている方がよみがえられたイエスだと最初気がつかなかったのですが、「マリア」と自分の名前を呼ばれた途端に、この方がイエスだと気がつくのです。

イエスの弟子となって一緒にあちらこちらを巡り歩く生活を何年も続けてきました。その間、何度もイエスはマリアの名前を呼びながら、いろいろなことを語り合ったのでしょ。あるときは一緒に悲しみ、あるときは一緒に喜び、またあるときは冗談を言い合って一緒に笑ってくれた。今マリアが耳にした自分を呼ぶ声は、まさに自分と一緒に歩んでくれたあの生きているイエスの懐かしい響き。私の名前を呼んでくださった方は、死んだのではない。生きておられる。よみがえられた。それがわかった瞬間でした。私の名前を呼ぶ方のように答えよう。なにもことばが出ません。ただ出て来たことばは、「ラボニ。」マリアがいつもイエスに呼びかけるときに使っていた言葉が反射的に口から出てきました。

3) 「わたしの兄弟たちの所に行つて」

この後、マリアは弟子たちの所に走り、こう伝えます。18節「私は主を見ました。」これを聞いた弟子たちがどんな反応をしたか、聖書には書かれていません。でも19節を見る、「弟子たちのいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた」とあるので、この弟子たちはマリアの報告を聞いても依然として堅く信仰の殻を閉じて、主のよみがえりを信じなかったことが推測されます。そんな弟子たちであっても主は7節で「わたしの兄弟たちの所に行つて」と語っているところに目を留めたいと思います。これは大きな励ましです。弟子たちのように、今は主のよみがえりを信じられなくても、本当に天の御国に言えるのかしらと迷っていてもかまわない。あるいは、いつかこのマリアのように墓の前で泣き崩れるかも知れません。でも、主の励ましは変わらない。「わたしの兄弟たち」「なぜ泣いているのですか。」「あなたが失った愛する人も死んで終わりではない。わたしが取り戻します。死からよみがえります。あなたも同じです。やがて死ぬことになっても、あなたもよみがえり、やがて天の御国に迎えられていく。だから、あなたは泣く必要がない。あなたはわたしの兄弟、姉妹です。」

昨年私たちは、藤野聖山園に教会の墓地を買うことができ、これから私たちはその上に墓碑を建てていく予定です。墓とはどんな場所であるのか、今日の所から教えられます。墓と言えば、今までは亡くなった方を思い起こして涙を流す場所ではなかった。でも、墓はよみがえられた主と出会う場所。自分の名前を親しく呼んでくださって語りか

けてくださる場所。もう自分の人生はなにもかもおしまいだと嘆くところではない。なくしたものを取り戻し、喜びが与えられる場所となる。

もちろんそれでも、いろいろなことで私たちは揺り動かされ、気落ちしたり、悲しみ暮れたり、心が真っ暗になることもあるでしょう。その暗闇は、まるで墓の穴を覗いたときのような恐ろしい闇を感じるかもしれない。けれども主はどこに立っておられましたか。マリアは墓の中をのぞき込んだとき、墓の中にはおられなかった。マリアの背中のほう、墓の穴とは反対側に朝日に照らされたイエスのお姿がありました。

死からよみがえられ、墓の前で泣き崩れている私たちの名を親しく呼んでくださり、朽ちることのない真の希望を与えてくださるイエスの御名をあがめます。